

令和8年度にむけた改善方策

1 キャリア教育

キャリア教育の研究校として、令和7年度は、1年生でのキャリア・パスポートの指導について、そして地域と連携した体験活動（非認知能力の育成）の見直しに取り組みました。1年生でのキャリア・パスポートの作成では、1年生が自分を振り返り、他の子と一緒に取り組む活動（つながる力）自分のよさ、自分の得意を見つける活動（見つめる力）自分ができることを探す活動（たかめる力）をキャリア・パスポートに反映させることができました。

キャリア・パスポートは教師が子どもの成長を認めること、子どもががんばったことを肯定的に評価すること（ほめること）が形に残るものです。キャリア・パスポートは今この時に力にならなくても、中学生、高校生の時に振り返って力になる、とされています。その時に役立つよう、令和8年度は、全学級において、年度始めと年度終わりのキャリア・パスポートの指導時間に合わせ、その日に、本校で継続して指導をしていただいている筑波大学教授の藤田晃之先生に來校いただき、指導を受ける予定です。翠と溪の学び舎（尾山台中学校・玉堤小学校・尾山台小学校）の3校でのキャリア・パスポートの連携も引き続き進めていきます。尾山台中学校の先生方と玉堤小学校の先生方に、尾山台小学校でのキャリア・パスポート作成の授業（2学期始めの授業）を研究授業の形で参観いただき、3校での理解を深めていく予定です。

また、令和7年度は、「ほめて伸ばす、認めて伸ばす」ということを重視していましたが、令和8年度は「ありがとう」という言葉を大切に、そもそも勤労の根本には「ありがとう」があること、その「ありがとう」を言う、言われる活動を学校の教育活動や地域と連携した活動の中で体験していくことができるように計画を立てています。地域と連携した体験活動では、例えば芝信用金庫さんに協力をいただいて金融教育を入れることや、消防団の方に協力をいただいて自分たちで自分たちの町を守る活動の学習、商店街や都市大学の方に協力をいただいてハッピーロードの石畳を中心とした街づくりの学習を新たな体験活動として計画しています。これは、子どもたちが必ず学習する内容の延長にある学習であり、児童が学習する上で負担のないようにすることや、児童、保護者、教職員が時間に追われるということがない活動として考えています。無理なくできる、持続的にできる地域と連携した体験活動（非認知能力の育成）について取り組んでまいります。

2 読書・日記

日記については、学年学級によりますが、大きな成果を出している学年学級があります。これを、無理のない範囲で広げていくことができるように進めていきます。令和7年度の保護者会でお話ししておりますように、「書く」力は、1年生から6年生までの教科書を見れば、どの程度の力を付ければよいかということが見えてきます。学校での作文指導は、短作文指導になることがほとんどです。2年生以上の国語の教科書の最初の部分は、日記を書く内容（6年生は気になったニュースを1年間書きためよう）になっています。日記については子どもたちの様子を見て、無理のない範

困で指導をしていきます。御協力いただけますと幸いです。もちろん、毎日日記を書かせたいというお考えの御家庭や、実際に書くことができるというお子さんは、できるだけ書いていただきたいと考えています。提出日にまとめて出していただいてもいいですし、担任と相談いただいてもどのようにしていくか決めていただくなども考えられます。困ったら担任まで御相談ください。

読書については、家庭に任せるという姿勢ではなく、学校生活の中で読書をする、という姿勢にすることで、改善に向けていきたいと考えています。司書教諭の教員を中心に、図書館司書とも連携し、図書室の活用をさらに深められるようにしていきます。一部ですが、世田谷図書館の本はタブレットで読むことができるようになっていきます。タブレットの活用については校内でも議論をしています。この時間はタブレットを活用する、この時間はしない、と明確に定め、子どもの自主性に任せるといった言葉に教員が任せすぎないようにせず、タブレットを使って読書をするときも、この読書の時間はタブレットを使った読書をしてもいいんだよと、タブレットを使っていいけれど読書以外には使わないんだよ、と子どもたちがはっきり分かるようにしていきます。そうすることで、この時間はタブレットを使って何をしてもいいんだ、という誤解を子どもたちが持たないように指導していきます。

3 頭を使って考える授業

学校評価アンケートにて、昨年度より保護者の数値で20%以上下がった設問が、

- ・【保護者】本校の授業は、頭を使って考えることが多いと感じる。(R7：66% R6：85%)

です。この設問の児童と教員、教職員の回答を比較してみます。

- ・【児童】授業では、頭を使って考えることが多いと思う。(R7：87% R6：95%)
- ・【教員】私の授業は、頭を使って考えることが多い。(R7：97% R6：100%)
- ・【教員+職員】尾山台小の授業は、頭を使って考えることが多い。(R7：92% R6：100%)

児童、教員、教職員は、数値としては高いですが、共通点として、数値は下がっています。実は、学校関係者評価委員会から、以下のような提言を受けています。(校長がまとめた言葉になります。)

「学校生活の中で子どもたちが頭を働かせる時間は圧倒的に授業の時間であり、それは教員が作り出すものである。授業の中で子どもたちが頭を働かす環境を作ること、考えること、意見を出し合うことから何かに気がつく経験、発見する経験ができるような授業を受けることがないと、学ぶということの楽しさに気がつくことができない。小学校での授業の時間はとても大切であるので、先生方には、子どもたちが頭を働かす授業を作るように力を注いでほしい。保護者対応等で時間的に厳しいということも聞くが、教員はなによりも授業に力を入れ、知的好奇心を育ててほしい。」

私は担任時代、話し合いの授業が大好きでした。話し合うことができる子どもは作文を書くことができるようになります。

「Aという意見とBという意見がぶつかり、Cという意見が出てくる。そのCという意見に対

して、Dという意見が出てCにぶつかる。そうすると、新たにEという意見が出てくる。意見がぶつかることはけんかのように見えることもあるが、実はけんかではなく、クラス全員で、より良い考えを生み出す作業をしていることに気がついた。話し合う時間は、発表できる機会は少ないが、新しい考えに出会う楽しい時間になっている。」これは平成時代、私が担任時代の学級の児童が卒業前に残した言葉です。私は話し合う授業が好きでしたが、教員はそれぞれ教科の専門性があり、算数や理科が好きな先生は、その教科で知的好奇心を伝えることができます。令和8年度は、「頭を使って考える授業」について、子どもにも保護者の皆様にもわかる、伝わる授業を作っていくように、研修を深めてまいります。